リリカルなのは スクライア

ああああああああああああ！ やってらんない（大学）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのは　スクライア

【Ｎコード】
Ｎ４７６０Ｌ

【作者名】
あああああああああ！　やってらんない（大学）

【あらすじ】
マリアージュ事件から、半年後、スクライアの少年セロとそのデバイス”ブレイブハート”はとある遺跡の中で水晶の中に閉じ込められた少女リリス・レイスと刀型のデバイス・ルシファーと出会う。

第一話スクライアの少年（前書き）

今回はなのは達は名前だけです。

第一話スクライアの少年

「あぁー発掘かったりぃ」

俺はセロ・スクライア。スクライアは部族名だからセロが名前だ。

にしても、発掘面倒いなぁ。

まぁ、仕事だしうちは基本そう言う部族だし一応頑張るかぁ。

とは言え俺に捜索系統の魔法は得意ではない。

本来、俺達スクライアは遺跡発掘がメインの一族なのだがどう言う訳だが、俺には才能がない。

『まぁ、マスターは魔力高いのに、なんで、できないでしょうか？』

「うるさいぞ。ブレイブ、気にしてるんだから」

俺の首にかかっている緑の宝石型のインテリジェントデバイス”ブレイブハート”が皮肉交じり口調で言った。

一応、かのエースオブエース”高町なのは”さんのデバイス”レイジングハート”と兄弟機らしがどう言う訳だが相性が悪く、とつてもなく仲が悪い。

前に珍しくあたりの遺跡をあったので前の持ち主であるユーノさんに特定を依頼した時にたまたま同席していたなのはさんと遭遇して話をしている間延々と喧嘩していた。

『まぁ、このあたりはなさそうですし、大丈夫でしょう』

「そうか。なら、奥、行くか」

基本サーチが苦手な俺達はブレイブの判断に従っている。

「何だ？　これ……？」

俺達は奥の部屋に来て絶句してた。

そこには片手剣タイプの刀と壊れた弓、斧、大剣、レイピア、槍、短剣の計7本が床に突き刺さり、そして俺達と同い年くらいの少女が水晶の中にそれに囲まれる形に入っていった。

『どうします？　マスター？』

俺達は目の前の少女の近くまで歩いて行った。

ビー！　ビー！

《適合者を確認！　アンチユニットデバイス？・ルシファー及びアンチユニット？・リリス・レイスを起動》

俺達が少女の前まで来ると何かアナウンスがなった。

そんで、何か光った！？

「くっ！」

『マスター、何ですか？　その手に持っている物は？』

「うぇ！　何で俺の手に！？」

いつの間にかさっきまでささっていた剣が手に握られていた。

『お前が俺の新しい適合者か』

「喋った！」

喋った！　つまり、こいつもデバイスなのか？

何か、アンチユニットデバイス？とかアナウンス流れてたし。

カラン！

『落とすなぁ！』

俺が手を滑らして落とすと剣……確か、ルシファーだっけ？　でかい声で怒鳴った。

「えっ、あぁ、悪い」

俺は慌て拾い上げた。

『ったく、気をつけるよ。小僧！』

何か、この剣偉そうだな。

剣（デバイス）のくせに。

『ところで、小僧、お前達の名前は？』

「セロ・スクライア」

『ブレイブハートです』

『それにしても俺以外は全員機能停止か』

ルシファーは他の壊れたデバイスを見てさみしそうな声を上げた。

「ブレイブ」

『ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ』

俺は破損したデバイスを封印しブレイブに収容した。

『なにをする！』

「デバイスに詳しい人が居るからな。見せてもらおうとかと思ってな」

『多分、彼女ならどうにかできると思います』

『そうか。なら、頼む』

ルシファーはしぶしぶと納得した。

そう言えば、少女の方は……

ピキピキ！　パリーン！

俺が視線を移すと包んでいた水晶が砕けた。

ベチ！

そして、落ちた。しかも頭から！

「うっ、うにゅう、ここは？」

少女は頭をさすりながら起き上った。

赤い髪に黄色い瞳、よく見ると見ればかなり綺麗な子だな。

って、今はそんな事を考えてる場合じゃないな。

「おい、大丈夫か？」

「なんとか。と言うか、近くにいたなら受け止めて欲しかった」

「えっ、あぁ、ごめん」

彼女の言葉に俺は思いきり視線をそらした。

まぁ、そうだよなぁ。

「ところで、貴方達は？」

『私はブレイブハートです。こっちは私のマスターは……』

「セロ・スクライア。君は？」

何て言うか切り替えの早い子だな。

「リリス・レイス。……私って何者なんでしょう？」

「『はぁ！？』」

いや、俺が知る訳ないからって？

ってか、これって記憶喪失って奴？

やっぱ、ちゃんと受け止めておけばよかった。

『記憶が不完全な状態で覚醒したか。俺はルシファーだ。久しぶりだな』

「ルシファー？　私達知り合いなの？」

『あぁ、昔からの友人だ』

ルシファーは一人納得し、リリスに声をかけた。

何て言うか、俺らと話した時より優しく口調ない？

「取り敢えず、ここを出よ」

「うん」

俺が手を指しのばすとリリスは手を掴んだ。

何て言うか柔らかいな。

『マスター、顔が赤いですよ』

『照れているのな。小僧』

「うっ、うるさいなぁ」

うん、まぁ、図星なんだけどな。

ドーン！

『ガォォォン！』

そんな事を考えていると壁を突き破りヒョウ見たなロボットが出て来た。

キコカ！

何か人型に変形した。

『ガォォォン！』

変形したロボットはレーザーをリリスに向けて撃って来た。

「ブレイブ！　プロテクション」

『駄目です。間に合いません』

俺は速攻でプロテクションを展開しようとしたが完全に向こうの方が速い。

「フィールド・オン！」

リリスが手をかざすと光線がロボットに戻り、

ドーン！

破壊した。

「今のは？　リリス、一体何を！？」

「ふぇ、私何かした？」

俺が尋ねるとリリスは不思議そうな顔をした。

覚えてないのか？

その答えを聞いたルシファー「なるほど、無意識に力を行使したのか」と納得していた。

さっきの奴の仲間いるのか、わらないしここから早く出た方がいいな。

「早く出よ」

「うん」

俺はリリスの手を引いて走り出した。

第一話スクライアの少年（後書き）

こんなグダグダな感じですけど、これかも宜しくお願いします。

キャラ紹介（前書き）

今回は主要キャラ紹介です。

セロ「俺らの魔力などの情報載せます」

ブレイブ『情報を載せるって。どこまで載せるんですか？」

せっかくだから、リリスのスリーサイズ位まで

リリス「ふぇ！？　何載せようとしてるの！」

では、いってみよう！

リリス「ちょっと待ってぇぇぇ」

キャラ紹介

名前：セロ・スクライア
性別：男
魔力ランク：ＡＡ
年齢：１６歳
身長：１６８
性格：基本的に言えば年相応の少年でツッコミではあるが、細かい作業が苦手で言動がスクライアらしくない事が多い。一方では女性への免疫はあまり無く情調は小学生並み。本人の意思とは関係なく２つのインテリジェントデバイスを持つはめになり若干天然のリリスに振り回されると苦労が多い。ユーノ繋がりでなのは達とも顔見知りである。
容姿：同じスクライアであるため髪や目の色や容姿はユーノに近いが目つきは悪い。
好き・得意：料理・ツッコミ・近接系の攻撃魔法
趣味：読書
嫌い・苦手：細かい作業・遺跡の発掘
デバイス・インテリジェントデバイス”ブレイブハート”インテリジェントデバイス（アンチユニットデバイス）”ルシファー”
　ルシファーは常時開放で黒い刀。

ブレイブハート：リリース時は緑の宝石で起動時は短刀。レイジングハートの兄弟機だが相性が悪く仲悪い。性格はやや皮肉屋では、マスターであるセロの事は大事に思っており、彼のいう事には忠実である。バリアジャケットは構成してない。

ルシファー：黒い刀で柄に?と書かれておりリリースモードはない。古代ベルカ製のデバイスである。性格は偉そうでマスターであるセ

ロを基本小僧よばあり。また、リリスをとても大事に大事に思っており彼女には態度が緩和されている。また、騎士甲冑の構成はこちらが担当している。その時は蝙蝠をイメージにした青い鎧で兜で素顔がわからないようになっている。

名前：リリス・レイス
性別：女
魔力ランク：ＳＳＳ
年齢：不明（外見年齢は１５，６歳）
身長：１５９
スリーサイズ８３／５７／８４
性格：天然ボケでやきもち焼きで、記憶喪失の影響か精神年齢が幼く自分を発見したセロに懐いており彼に絶対的な信頼を寄せている。
容姿：赤い長髪に黄色い瞳で初期は巫女服の様な服を着ていたが、クラナガン到着時に青いロングスカートに白いシャツを買ってもらう。
好き・得意：セロ・防御魔法（？）
趣味：観光
嫌い：辛い物
デバイス：無いが、セロ会った時の服を自在に構成できる。

キャラ紹介（後書き）

リリス「って、本当に載せたんですか！　スリーサイズ」

まぁ、一応な。

セロ「／／／」

ブレイブ『マスター、顔が真っ赤ですよ』

ルシファー『本当に情調は小学生並だな』

セロ「うっ、うるさいなぁ」

まぁ、こんな感じの主要メンバーでお送りします。

第二話　蠍（さそり）（前書き）

今回は原作キャラだそうと思います。

セロ「誰が出るかは本編始まってからの楽しみだがな」

ブレイブ『では、本編始まります』

リリス「リリカルマジカル頑張ります」

第二話　蠍（さそり）

セロ「何、つかーしつこいなぁ」

『ダナ！　ダナ！　ダナ！　……』

始まっていきなりですけど、俺達はまだ遺跡の中で先の奴に仲間に追われまてます。

今度は戦車か。

しかも、大量に。

何か、ダナダナ言ってるよ。

キコカ！

「っあ、変形した」

「いや、見ればわかる。と言うか、何で変形する時の擬音が昔のトラ〇スフ〇ーマー？」

『さぁ、趣味じゃないのか？』

「誰の！？」

『誰かのじゃないですか？』

いや、マジで！？　誰のだよ！

そろそろ、出口だな。

「ブレイブ！　セット・アップ」

『Ｓｅｔ・Ｕｐ！』

ブレイブをリリースモードから起動させ短刀へ変形させた。

『それで、どうするつもりだ？』

「まぁ、見てろ。行くぞ！　ブレイブ」

『了解』

カラン！　カラン！　カラン！

外に出ると俺は魔法陣を展開させ、

「『ショック・ウェーブ！』」

ブレイブの刀身から衝撃波を放ち入口を崩した。

『なるほど、入口を破壊して連中を閉じ込めた訳か』

「まぁ、そう言う事。でも、長くもたないとも思うし、今のうちに逃げるか」

俺は再びリリスの手を握った。

やっぱ、柔らかいなぁ。

ユーノさん、繋がりで知り合いに女性が多いけど、そう言うのとは無縁だったなぁ。

一応、ヴィオヴィオ位とは手繋いだ事はあるけど、小さい子だから対象外だし。

まぁ、なのはさんにはユーノさんいるし、他の人達も怖い人が多いいから考えようにいたっては対象外だな。

そう考えるとリリスがはじめただな。

「どうしたの？　顔赤いけど」

「いや、別に何でもない」

何かそう考えると余計に緊張して来たなぁ。

――――時空官局・本局――――

「ん、どうした？　フェイト」

「いや、別になんか失礼こと言われた気が……気のせいかな」

「そうじゃないか」

僕が急に天井を仰いだフェイトに尋ねると苦笑いを浮かべながら答えた。

と言うか、本局で殺気を立てるのはやめて欲しい。
他の局員達が脅えている。
――――セロｓｉｄｅ――――
「っ！」
「どうしたの？　今度は顔が青いけど？」
「いっ、いや、本当に何でもない」
なんだぁ、今の殺気は！？
気のせいだよな。
ゴゴゴゴッ！
「なんだぁ？　地震！」
『いや、違う。この反応は奴か』
『そーりゃっさぁ！』
ドーン！
地響き共に巨大な鉄の蠍が出て来た。
ルシファーは『やはり、ザラックか』がつぶやくと、

『トランスフォーム』

キコカ！

蠍……改めザラックだけ、５メートル位の大きさの人型に変形した。

何言うか、凄くおっきいな。

遺跡の中で出会ったジャガーの倍近くはあるぞ。

『久しいな。ルシファー、リリス』

『あぁ、本当に久しぶりだな。まさかこの近くに封印されたいたのか』

「ふぇ、誰！？」

なんか因縁があるみたいだけど、リリスは記憶を失ってるみたいから完全に混乱している。

『ん？　誰だと、貴様本気で言ってるのか？』

『小僧！　俺をセットアップしろ！　奴に今のリリスの状態を知られる訳にはいかない！』

「えっ！　あぁ、わかった』

ルシファーはゼラックの言葉を聞き慌てだした。

セットアップと言われてもお前既に刀の形してるじゃん。

まぁ、いいや、やってみるか。

「セットアップ！」

『Ｓｅｔ・Ｕｐ！』

するとルシファーから光が放たれ、青い蝙蝠（こうもり）の様な鎧が装着していた。

これはベルカの騎士甲冑かな。

『まぁ、時間がなかったから、前の奴が作った物を流用させてもらったが大丈夫のようだな』

ルシファーは安心しているのに対し、

『ふはははは！　こんな小僧に俺の相手をさせようと言うのか？　下らん』

俺を見た大爆笑していた。

『そーりゃっさぁ！』

ザラックは俺に向けて腕を振り下ろしてきたが、

「……嘘だろ！」

簡単に避けれた。

何でかわからないけど、こいつの動きが見える。

これなら、行ける！

「ブレイブ！　セットアップ」

『Ｓｅｔ・Ｕｐ！』

俺はルシファーを持ているとは逆の手にブレイブを再び短刀にして、

「『ショック・ウェーブ！』」

『効かぬわぁ！』

ショック・ウェーブを放ったが弾き落としやがった。

「どうかなっ！」

『アイス・エッジ！』

ザン！

ルシファーに冷気を集中させ、

『うんぬっ！』

斬った。

と言うか斬れた。

『なるほど、切れ味は落ちておらず、今の持ち主相性も悪くない。それに……』

「アイゼン！」

『エクスプロージョン』

あれはヴィータのアイゼンのラケーテンハンマー。

ガン！

『邪魔が』

「なっ」

嘘だろ。

あれを簡単に受け止めた。

『入ったようだな』

ブン！

「うをぉ」

そのまま簡単にヴィータを弾きとばした。

『ふん、興が失せた』

俺に斬られた腕を拾いあげて自分の腕を自分が出て来た穴へと歩きはじめた。

「待ちやがれ。てめぇ、何もんだ！」

『ほう、夜天の騎士に感情が生れているとは、一度、これは奴に報告した方がいいな』

ヴィータを見て感心し穴に入った。

「どう言う意味だ？」

「完成したばかりの貴様らと会ったことあるだけだ」

ヴィータの叫び声にザラックは穴を降嫁しながら答えた。

「ちっ、逃げられた。それより、テメェ何もんだ？」

ヴィータは今度はこっちにアイゼンを向けてきた。

今度はこっちかよ。

あぁ、そう言えばこれしっかり顔まで隠れてるや。

となると、解除しないとな。

「モードリリース」

『リリース』

騎士甲冑を俺は当てて解除した。

「てめぇ、この間ユーノとこ居た奴じゃねか」

「どーも」

『お久ぶりです。ヴィータ嬢』

俺は苦笑いを浮かべた。

「ところで、そいつは？」

「あぁ、この娘は……」

「私はリリス・レイスです」

俺が紹介使用した瞬間、リリスはヴィータの頭をなでながら自己紹介をしていた。

って、あれ！？

いつの間にさっきまで俺の後に居たのに！

『相変わらず、早いな』

それを見たルシファーは半ば呆れ半ば感心ていた。

第二話　蠍（さそり）（後書き）

リリス「今回の登場した原作キャラはフェイト、クロノ、ヴィータでした」

ブレイブ『それにしても、提督殿は一人称のみでしたからわかりにくいですけどね』

クロノ「うるさいぞ。ブレイブハート」

ブレイブ『ところで、マスターは？』

クロノ「セロなら、あそこに」

フェイト「へぇ、セロは私達の怖いって思っていたんだ？」

セロ「いや、何と言いますか。ごめんなさい」

フェイト「少し、頭冷やそうか？」

ブレイブ『ちょっ、フェイト嬢！　それは別の人のセリフです」

リリス「せっ、セロ！」

フェイト「ちょっと、邪魔しないでくれないかな」

リリス「ばっ、バインド？」

フェイト「トライデントスマッシャー！」

ブレイブ『マスターァァァァ！』

リリス「セロォォォォ」

ルシファー「いや、自業自得だろ」

第三話　リリスの服選び

――――クラナガン――――

「セロ、ここは？」

「ここはクラナガン、ミッドチルダの首都だ」

リリスはグランガンを見まわしていた。

どうやら、よっぽど珍しいようだな。

「おい、お前達、今はやてに連絡入れたから勝手に動くなよ」

「はーい」

『言われなくても、子供じゃないのですから。勝手にどっかに行きませんよ。それにしても、子供扱いされたのが不服なのはわかりますが、いつまでも不機嫌なのはどうかと思いますよ。ヴィータ嬢』

ヴィータの奴、リリスに頭なでやられて、子供扱いされたのがよっぽど不服なのか機嫌悪そうだ。

まぁ、今のさらにブレイブの一言に不機嫌になったようだけど。

見た目子供なんだし、初対面の相手の子供扱いくらいはして欲しいよなぁ。

そう言うところがガキなんだよ。

「何か言ったか？」
「いや、別に？」
流石がヴォルケンリッターするどいな。
って、この場合は関係ないか。
くいくい
「ん、どうしただ？　リリス」
「あれ何？」
リリスが指さした方を見てるとそこにあったのは……
自販機？
何で？
『教えてやれ、今のリリスは自身の名前以外の記憶がないんだ。あんなものでも珍しいんだ』
俺とヴィータがポカンとしているとルシファーがそう告げた。
マジかよ。
「あれは自動販売機って言って飲み物を買う機械だ」

「へぇ、じゃああれは？」

今度はバスか。

まかさ、これはやてさんが来るまで続くのか？

２０分後

黒い車が俺達の前に止まり助手席からはやてさんとリィンが降りて来た。

「ごめん、道が込んでいて遅くなった。その子が連絡にあった子か？」

「えぇ、まぁ、そうなります」

「初めまして、リリス・レイスです」

「そうか。リリスちゃんか。って、二人とも何疲れてるんや？　ブレイブハートも？」

「いえ、別に」

「何でもねぇよ」

『お気になさらずに』

「そうか。ならええんやけど」

はやてさんが来るまでの間に聞かれた物はテレビ、電車、犬、猫、航空魔導師、そして、商業広告用の飛行船など。

正直疲れた。

特に商業広告用の飛行船。

「うちは、八神はやてや。車を運転してたのがシグナム、そんでこっちが……」

「リィンです」

はやてさんは自分達の紹介をした。

それにしても、相変わらずリィンはちっこいなぁ。

「そんで、セロの腰にささっているのが、この子と同様に連絡にあったルシファーやっけ」

『あぁ、ルシファーだ』

「まぁ、立ち話もなんやし、車の中行こうか」

「はい。行くぞ、リリス」

「うん」

俺が声をかけるとさっきまでリィンから、視線を移しこちらにテトテトと歩いて来て俺の手を握った。

「おや、おや、二人とも随分と仲がええな」

はやてさんはこちらを見てニヤニヤと笑っていた。

この人の目の前でこんなことやればこうなるよなぁ。

「べっ、別にそんなじゃ」

「そうかぁ。あたしとクラナガンに来た時にはそうだったじゃないか」

ヴィータはニヤニヤと笑ってノッテきた。

リリスとブレイブに子供扱いされた仕返しかぁ。

俺完璧に巻き添えじゃん。

まぁ、心の中でしたけど。

「とっ、とにかく、車に乗るぞ」

俺はリリスと車に乗りこんだ。

「うわぁ。顔真っ赤です」

リィンまでぇ！

リリスの奴何をしたぁ。

いや、別に俺自身心当たりがない訳じゃないが。

「すまんな。主のあれは今に始まった事ではないできれば気にしないでくれ」

「別にいいですよ。気にしてませんから」

車に乗るとシグナムさんが申し訳なそうに謝って来た。

まぁ、はやてさんはともかくヴィータとリィンには俺自身も身に覚えがあるし。

続けて、はやてさん、ヴィータ、リィンも乗って来た。

ってか、はやてさんが横に、何かやな予感。

「そう言えば、ヴィータ、偉くタイミング良く来た何で？」

「教導の遠征の帰りに、いきなり魔力反応が大量に出て来たからな、生徒を先に帰らしてあたしだけ来たんだよ」

あぁ、そう言えば蠍（さそり）もそうだったけど、そう言えば連中にも魔力流れていたな。

変形した時や光線撃った時とか。

「にしても、リリスの服ボロボロやな」

「それに珍しい服ですね」

はやてさんとリィンはリリスの服を珍しがっていた。
まぁ、確かに珍しいよなこの服は？
「そう。なら、魔力で構成したものだからいつでも消せるよ」
「なっ！」
リリスがそう言うと服が光の粒子になり消えていった。
ってか、来てないのかよ！
下ぁ！
「見ちゃあかん！」
「わかってますよ」
俺は慌てて窓の外に顔向けた。
一瞬だったけど良い体していたなぁ。
って、何考えているんだ！？　俺！
「取り敢えず、服買わんとなぁ」
『そうですね』
『はぁ、記憶と一緒に羞恥心も失ったか』

その光景にルシファー一人が冷静に呆れていた。

――――大手デパート・服売り場――――

取り敢えず、リリスが服の修復を終えた俺達はデパートの服屋に移動した。

そんで、今現在はリリスは服の方ははやてさん達が選んくれた服の試着をしている。

ちなみに服の代金は俺が支払うことにした。

本来ならはやてさんが支払うと言っていたがそこまで世話になる訳行かないから自分で支払う事にした。

『それにしても、ほんとにいいんですか？　マスター？』

「まぁ、これくらいはな。まだ、貯金あるし」

『ところで、一つ聞きたいのが、今の夜天の主は騎士達をどう見てる？』

「どう見てるって、大事な家族って感じだけど」

『えぇ、他者から見てもともて仲の良い家族ですよ』

『そうか、それは良かった。夜天の親も浮かばれる』

ルシファーは俺の事を聞いて酷く安心していた。

どうしたんだ？　こいつ？

「おーい、取り敢えず、一着目終わったでぇ」

おっ、どうやら一着目終わったみいだな。

「では、一着目はシグナムが選んだ服や」

「こっ、これは！」

何で、チャイナ！？

『シグナム殿、これはいったい？』

「ん、駄目だったか？　動きやすそうだったから選んだのだが」

あぁ、シグナムさんのセレクトか。

なんか納得いった。

「いや、駄目ってことないけど日常の服ですよ」

「せやな。これは完璧にコスプレやなぁ。じゃ、次はうちやな」

次ははやてさんかぁ。

何だぁ？　この不安は！？

「似合うかな？」

試着を終えたリリスがカーテンを開いた。

次に着ていたのは……

「今度はメイド服！？」

『夜天の主よ。これはど言うことだ？』

「いや、目に入ったからつい」

「いやいや、ついじゃないですよ！」

と言うかここ本当に大手デパートの服屋！？

何か、不安になって来た！

「あっ、やっぱり、じゃあ最後はヴィータ＆ａｍｐ；リィンや」

今度で最後か。

まともなの来い！

マジで頼むかな。

「どうかなぁ？」

リリスは今度は青いロングスカートに白い長袖のシャツで出て来た。

「良かった！　一番まともだ！」
『それにもとの素材が良い分良く似合ってますね』
『あぁ、これ決定だな』
ほんと良かった。最後の二人が一番まともだ。
「それじゃ、これで決定ですね」
「そんじゃ、店員さぁーん」
二人は何か勝ち誇った顔で店員を呼んだ。
この人たち勝負してな。
「彼女さんへのプレゼントですか？」
「あっ、いえ、違います」
『まぁ、プレゼントには変わりませんけどね』
『あぁ、確かにな』
「はぁ」
店員は俺とデバイス2機の答えを聞いて奇怪（きかい）な顔していた。
あぁ、考えてなかった。

男が女性にプレゼントを買うと言ったら、そうなるよなぁ。

と言うか、この人数なら、家族って言う選択肢はなかったのか！？

店員さん！

くいくい

「ん？　どうした？　リリス」

また、質問ラッシュか！？

「似合ってる？」

「あぁ、似合ってるよ」

俺の答えを聞いたリリスは偉くご機嫌な笑みを浮かべた。

第三話　リリスの服選び（後書き）

次回は管理局・本局に行きます。

ちなみに八神家は全員だそうと思ったのですが車のスペースは状無理と判断したので、人数をしぼらせていたできました。

第四話　メネシス

――――管理局・本局――――

こと！

「そんで、君達とヴィータが戦った奴の事を教えてくれへんか」

はやてさんはマッグカップを置き一息つくとルシファーに連中とルシファー自身の事を尋ねた。

その表情は少しばかり疲れていた。

さすがに、はやてさんもリリスの質問攻めに疲れたらしい。

ちなみに今、リリスの相手はヴォルケンリッターがやっている。

大丈夫かな。

皆。

『連中はメネシスだ』

「メネシス？」

何か聞いたこともない単語だな。

『あぁ、連中は古代ベルカの戦争の中で造られた人工（ゲノ）リンカーコアを搭載した機械兵器だ』

「人工のリンカーコアそんなの可能なん！？」

「可能だと思いますよ。アルハザートが実在した時代ですし」

「セロ、随分と冷静やな」

「まぁ、何て言いますか」

もう、慣れた。

と言うか、ここまで来ればなんでも来い。

ってか、便利だなアルハザード。

『とは言え、連中は大戦中を産み出した文明を裏切ったがな』

『裏切ったと言いますと？』

何か引っかける言い方だな。

と言うか、やな予感しかしないな。

『連中の中枢は世界を滅ぼすのは人間だ。世界はもっとシンプルであるべきだ。世界は我々が支配し人間は滅ぼすと言う判断を下した』

うわぁ、わかりやすい。

『実際、連中は大戦時、幾つもの領地を滅ぼし、幾つ人のも魔導師を殺しっていった。そう高名な魔導師さえも』

「っちょ、待ってヴィータの報告じゃ、感じ取れた魔力はほとんどBクラス程度はずやで」

『あぁ、確かに魔力はな。だが、そこが重要じゃない。問題視すべきは数だ』

驚くはやてさんにルシファーはいったて冷静な返答を返した。

『数ですか？』

『あぁ、数だ。人間の魔導師は戦っていれば、いつか魔力の消費で疲れが来て隙ができる。どんな魔導師でも。だが、連中は機械だ。倒されても、エネルギーが尽きても、また、新しい機体を量産すればいい。そうやって量産された機体で囲み一斉に集中砲火すれば、勝てる。例え、それが夜天の主でもな』

マジかよ。はやてさん位の魔力の持ち主でも勝てねぇのかよ。

確かに、人間じゃ、そう言った局面では不利だよなぁ。

スバスさんとかでもあまり人間とかわないと言うか人間だし、そう考えると機械の方が有利だよな。

この一点だけはどうしようもないよなぁ。

「じゃあ、一番魔力がデカかったあの蠍のおっさんが中枢なのか？」

『おっさんって、まぁ、確かに奴のＡＩは男性に設定されいるが……まぁ、奴は中枢ではない。指揮官の一体だ』

俺の言葉にルシファーは呆れながら答えた。

と言うか、おっさんで、合ってるんだ。

ってか、指揮官クラスの一体！？

嫌な予感して来た。

『連中は全部で４種類に分けられる。獣型のビースト、戦車型のタンク、バイク型のスピダー、戦闘機型のステレスだ。そして、それらを指揮するのがザラック、ブレスト、アース、ストームの４体だ』

うわ、やっぱりいっぱいた。

『じゃあ、中枢ってどんなの奴なんですか？』

『トーラーと言う事意外は殆んど思いだせん。どうやら、俺も覚醒が不完全の様だな』

ルシファーは少々もし訳なそうに答えた。

まぁ、一緒にあそこにいたリリスが、ああならこいつにも多少名不具合があってもおかしくないな。

「そうか。連中の事はだいたいわかった。次は君とあの子事を教えてくれへんかな？」

『俺とリリスは連中の破壊と封印を目的に造られたアンチユニットナンバー？とナンバー？だ』

アンチユニットってそう言う事か。

「あれ？　でも、お前も壊れた奴らもデバイスなのにリリスだけ、人の姿なんだ？」

『それは、単純に皮肉だ。封印はリリスにしか発動できないからなだから、人の形で造られた』

何て言うか、理由が安易だし、身勝手だな。

だから、リリスを席を外させたのか。

これは、今の彼女に聞かせない方がいいかもな。

『そして、俺らは前のマスター共に奴らに封印しに向かった。だが、それは失敗した。トーラーは単に能力の高い魔導師を殺していた訳ではなかった。倒した魔導師のリンカーコアを吸収して、自らを強化していた。俺達は予想外の魔力よって結果が今に至る』

ルシファーは悔しそうに告げた。

まぁ、目が覚めたら自部達以外は粉々、しかも連中は健在というのは悔しいよな。

「それで、そいつはどこに封印されてるんや？」

『俺とリリスがいたところだ。まぁ、もう封印がとけて、いないといないと思うがな。基地となる工場大量にあるしな』

だよなぁ、居場所がバレていてそこに留まっている奴はないよなぁ。

特に戦争中に造られた機械なら。

とっくに別の場所に移ってるよなぁ。

「最後に全く関係な質問やけど、夜天の主が引き合い出てたけど歴代の主と面識があるん？」

『あぁ、初代夜天の主。言わば、夜天の書の製造者とは、友人だったんだ』

「へぇ、初代夜天の主ってどんな人だったなん？」

『とても、真っ直ぐな強い女性だが、病気で子供が造れなくてな、ヴォルケンリッターを自らの子として造り出し、戦場に送りだす事を反対していた。それでは、何のため守護騎士なんだか』

ルシファーの奴はとてもとても楽しそうに答えた。

『彼女は完成させる前にストームに殺されたがな。だが、彼女の願いである騎士達の幸せが叶っただけでも友人として喜ばしい』

ルシファーは嬉しそうにそう告げた。

まぁ、確かに今のヴォルケンリッターは幸せそうだもんな。

それにしても、あの蠍のおっさんが言っていたのはそう意味か。

――――メネシスの基地――――

『以上が今現在わかっている状況だ』

『成程、あの忌々しいアンチユニットどもも起動していたか。だが、リリスの記憶が失っているのは俺様達には喜ばしい事だ。ふはははは、あはははは』

俺の報告は笑い声を上げた。

相変わらず品の無い笑い声だ。

なぜ、この様な奴が我々の中枢なんだ。

『それと、ヴォルケンリッターが完成していた』

『ほう、だから何だ？』

『いや、一応報告しただけだ。ところで、他の連中はどうした？』

『別のファクトリーを起動させに行った。きさまもさっと起動させにって来い！』

『ふん、言われなくてもわかっている。トランスフォーム』

やはりだ。やはり、こいつは気にいらん。

とっと、別に工場に向かうか。

その方が俺の精神状にいい。

『そーりゃっさぁ！』

ガン！　ガラガラガラ！

俺は気分を切り替え目の前の岩石を破壊した。

第四話　メネシス（後書き）

それにても、はやての関西弁は書くのが難しいです。書いていてあっているのか、凄く不安になります。

キャラ紹介2（前書き）

今回はザラックの説明をします。

ザラック『ふむ、宜しく頼む』

キャラ紹介２

名前：ザラック

性別：ＡＩ状は男

魔力ランク：ＡＡ＋

性格：正々堂々とした戦いを好み武人としての生きざまを望みんでいる。また、人間への嫌悪感は他の面々よりか薄く、ルシファー達アンチユニットとの決着が目的であるためトーラーを含むメネシス達とは仲が悪い。

容姿：緑を基調とした強大な蠍（さそり）型と人型の二つの形態を持ち武装はほぼ近接用となっているが、尾の部分に遠距離用の武装もある。

好き・得意：正々堂々とした戦い・自然

嫌い・苦手：トーラー達他のメネシスのメンバー・卑怯な事

キャラ紹介2（後書き）

ちなみに、ザラックのイメージはトラン〇フ〇ーマー　スーパーリ〇クのメ〇ザラックです。

ザラック『そーりゃっさぁ！』

第五話　ザラック対エリオ（前書き）

今回は主人公出番なし！

セロ「えっ！！」

第五話　ザラック対エリオ

環境保護区

俺のファクトリーはこの近くだな。

バーン！

ん、今のは銃声？　妙だな？　ここは、データには環境保護区と書いてあるはずだ。

少し様子を見てみるか。

「っち、外しか！」

行った先には、ガラの悪そうな男が猟銃が、舌打ちをしていた。

男の視線の席には、1頭の鹿がいた。

よく見てみると前足のあたりから、血が流れていた。

あの男がやったのか。

「今度は、逃げるなよ」

男は、猟銃を構える。

バーン！

そして、そのまま体勢から猟銃を放つ。
だが、それが、届く事はない。
何故なら……
カーン！
「なんだよ……これ？」
俺が弾いたのだから！！
「貴様！　何をしている？」
俺は人がに変形し、男を睨みつける。
男は、口をパクパクさせて顔面をしていた。
「何もしていると聞いているのだ！？」
「なっ、なにをって……かっ、狩りだよ」
猟銃を俺の目へと掲げる。
「そうか。何故、そんな事をした？」
「スっ……ストレス解消だよ」
成程、ストレス解消。

つまり、道楽か。生きるために食材を手に入れるためでは、この男のただの道楽と言うことか。

ならば……

「死ねぇぇぇ！」

ブン！

俺は勢いよく拳を振り下ろす。

男は避け様ともせず、ペタリと座り込む。

だが、俺の手に男を押しつぶした反応はなかった。

腕を上げるてみると片手に男の服の襟を掴んみ、もう片方の手に赤い髪の少年が立っていた。

エリオｓｉｄｅ

銃声が聞こえて来て密猟者らしき、男性を確保したのはいいんだけど……

これは、なんだろ？

ロボットだよね。何て言うか、ガジェットとは違うし……

「なんだ？　貴様は？　この密猟者の仲間か」

「違います。僕は時空管理局・自然保護隊所属、エリオ・モンディ

アル二等陸士です」

思わず、答えたけど……喋った！？

僕の答えを聞いたロボットは少し間を開けてから……

頷き「なるほど」と言った。

「公僕よ、何故助ける？　この男は命を自身の娯楽のために脅かす存在だぞ？」

「話はわかります。だけど、彼は僕が、しかるべき場所に送って、しかる処罰を受けさせます」

ロボットは、表情は読み取れる事はできないけど、強い威圧感を放っていた。

「言い分は確かに通っている」

ロボットは一瞬納得した様子を見せたが……

「だが、こう言ったやから、一度痛めに合わせた方が早い！」

ロボットは拳を振り降ろす。

『Ｓｏｎｉｃ　Ｂｏｏｍ！』

ザッラクｓｉｄｅ

俺の拳は当たる事なく避けられた。

先程と言い、早いな。

「だぁぁぁぁっ！」

っく、スピードが追いつかん！

これでは攻撃当てられん。

エリオｓｉｄｅ

スピードが上な分、攻撃は、当てられているけど、装甲が固くてダメージが与えられていない。

このままじゃ、魔力や体力が先に尽きて、負ける。

だからって、攻撃に魔力を全部回す訳にはいかない。

そうすると、密猟者を逃がすことになってしまう。

三人称ｓｉｄｅ

エリオはスピードで、撹乱しながら攻撃を重ねて行き、一方、ザラックは、防御の体勢をとり、続けてエリオの魔力や体力を尽きる待つ体勢をとる。

ビュン！

「うわぁ！」

そんな中、エリオの足にワイヤーの様なものが絡みつき、バランスを崩させる。

ザッラクはワイヤーの様なものに見覚えがあるのか『余計な事を……』と呟いた。

『アース！　どういうつもりだ！！』

少し苛立ちを籠った声を出す。

すると、別のロボットが現れて……

『どうも、こうも、お前が苦戦しているみたいだから、ボクチン手伝ってやろうしてただけさ』

恩着せがましく言って来た。

その外見は、バイクの後輪を脚部にして、ハンドルを腕にして、片方からエリオの足に絡まっているワイヤーの様なものがダルンと伸びており、ザイズは２ｍ位で、ザラックと比較すると変形は中途半端で、お世辞でも恰好がいいとは言えない。

わかりやすく言えば、ひよこと鶏の間の様な感じである。

『そうか！』

ザッシュ！

ザラックはエリオの足に絡まっていたワイヤーを尻尾を振り降ろし切り、

『悪かったなぁ！』

そのまま、尻尾からビームを出してアースを吹き飛ばした。

吹き飛ばされたアースは『あぁ、痛いよ～』と情けない声を出して木にぶつかった。

『なっ、何するんだぉ？』

『貴様を俺の戦いの邪魔をするなぁ！！』

アースに対して腕で掴み答えて投げ飛ばした。

アースは空中で『トーラー様に言いつけてやるぅ～』となさけない捨てゼリフを言い。

そして、キランと星になった。

それを聞いたザラックは『ふん、好きにしろ』と言いエリオに視線を向ける。

『さてと、少年よ。この戦い私の負けだ』

「えっ！」

エリオはザラックの言葉を聞いて目を丸くした。

「なんで？」

『理由は単純だ。あれでも、あいつは俺の身内でな。奴が乱入したして時点で俺のやり方と反したものになってしまっていた。だから、意図で気はないとは、言え、俺の負けだ』

エリオに対して腕を組みながら答える。

そして、再び蠍型へと変形し、穴を掘りはじめる。

『少年よ、ルシファーと言う刀の形をしたデバイスにあったら伝えておいてくれ、貴様のとの決着は何があろうとも付けてやる』

穴を掘る中それだけ言うと『そーりゃっさぁ！』と叫びあの中へと潜って行った。

第六話　ストーム襲来

どーも、皆さん、初めまして！

偉大なるトーラー様の部下、ストームでぇーーーす！

たいだいま、トーラー様のご命令でミットチルダの現首都の上空にいまーーーす！

「さぁ、お前達ぃ、やぁーーーーっておしまい！」

キコカ！

僕が号令を出すと部下のステレス達は変形して砲撃や爆撃を開始した。

もっとも、前回のアースみたいな中途半端な変形では、比較的に人に近い形でぇす。

それじゃ、僕も……

「トランスフォーム！」

キコカ！

変形して爆撃と砲撃を開始すまぁーーす。

さぁ、悲鳴を上げてくださいよ！　人間（かとうせいぶつ）ウ！

「あはははははっ！」

っあ、今、もしかして、これ好成績じゃね？

武骨な蠍や、よわっちぃバイクや、うすのろの戦車野郎と違ってぇ！

あはぁ！

『アクセルシューター』

あっ、なんかピンクの光が飛んできたぁ！？

って、このままじゃ、直げ……

ドーン！

「警告無しに撃ちゃったけど、いいのかなぁ？」

爆煙（ばくえん）の向こうから不安げな声が聞こえてきたでけど、疑問に思うなら撃たないでぇ！！

『大丈夫だろ。どーせ、話し合いをしようとしても、話を聞かん馬鹿だからな」

なんか聞き覚えがある声がバッサリと答える。

ってか……

「誰が馬鹿ですか？　ルシファー！！」

『貴様とブレスト、アースと合わせて3馬鹿トリオだろ』

「なにをぉ！」

ほんとムカつくなぁ！

こいつは！

『あぁ、少なくともブレストは馬鹿ではないな。知恵は回るしな』

「なんだとっ！　もう、本当に頭にきたっ！　お前達、やっておしまい」

セロｓｉｄｅ

あぁ、なんかキレたよ。

何で、こいつは余計なこ言うかなぁ？

『マスター！　ぼさっとしないでください！　撃ってきます！』

ブレイブが機嫌が悪そうに警告してきた。

そんなに嫌か？　レイジングハートと一緒にいるのが？

つっか、テイション高いな！　敵！！

「にしても、どれもＳＦ作品のできそこないみたいなんだ？」

「あぁ、これなら、まだガジェット方ならマシかもね」

俺の一言になのはさんも、苦笑い浮かべなら同意しした。

ガジェットって、確かＪＳ事件の時に動きまわっていた機械だよな。

当時は、遺跡の発掘で別の次元世界に居たから新聞とかテレビでしか見た事ないけどな。

『まぁ、それでも蠍はマシだろ』

「確かに一番某ロボット生命体みたいだたしなっ！」

『ショック・ウェーブ！』

ルシファーの言葉に同意しながら、ショック・ウェーブで量産機の一体を斬った。

こいつとあとはあのスター〇ォーズのできそこないの変形戦車だよなぁ。

「もう、ほんとに頭にきた！　お前らぁ、完璧に潰すですぅ！」

『できらなぁ！』

ルシファーの刀身から、冷気から発生させる『フリージング』で、量産機の幾つかを凍らせた。

『アクセルシューター』

さらに氷漬けになった量産機達をなのささんによって砕かれた。

「あぁ、タカシ！　イチロォー！」

えぇ、名前付いているの？

ってかつけのか！？

それ聞いたなのはさんは「なんで日本の名前！？」とツッコンだ。

『気にしない方がいいぞ。こいつら、３馬鹿は昔から、それこそ人間に反旗を翻す前からこんな感じだから……』

ルシファーは若干呆れながら、告げた。

ってか、昔からぁ！

これで、よく初代の夜天の主を倒せたな。

あぁ、数で倒したんだっけ？

じゃあ、あんま実力とか関係ないのか。

「こうなったおか「ディバイン・バスター！」

ストームが腕から砲撃をする前に撃たれたが……

「うわぁ、危ないですねぇ。あったらどうするんですか？」

みごとに回避していた。

嘘だろぉ！

あの状態で回避したのかよ！？

『まぁ、驚くな。こう言った回避率や空中での機動力だけは、あぁ、見えて一番高いだんぞ！　あれは！』

マジかよ！？

あんなので、一番高いのかよ！！

『レイジングハート！　そんな事にも気付かなかったのですか？』

『余計なお世話です！』

ここぞとばかり、ブレイブはレイジングハートに嫌味を言う。

こんな時に険悪なムードを出さないでくれよ！　出自不明！

「お前達！　反撃開始でぇすぅ！」

ストームは命令を出すが量産機達は何の反応もしない。

まぁ、それもそのはず……

「ってあれ？　うっそ！？　全部撃墜されてるぅ！」

さっきの、なのはさんの攻撃で全滅しているのだから！

「くぅ！　覚えていろよ！」

キコカ！

なんか、完璧にやられ役の言葉を言って、変形して飛んで言った。

あっ！　ほんとだ！　速い！！

第六話　ストーム襲来　（後書き）

次回はクロスリレーに参加させる最後のキャラを出します！

第七話　野心家・？

ミッドチルダ・地下道

そこには、タンクが変形した足はキャタピラ、肩には大砲、手はマジックハンドの様になっている横にも縦にも長いロボットが複数立っていた。

「どうやら、ストームの奴は負けて、撤退したみたいだな。まぁ、奴はお前が地下に潜りこませるための囮だから、構いはしないがな！」

その中でも一周りから、二周り位大きい機体へトーラーは通信の入れる。

「だから、しくじるなよぉ！　ブレストォ！」

「はっは、このブレストにお任せ下さいなんだなぁ」

ブレストと呼ばれた機体はトーラーの言葉に胸を叩きながら答える。

「そうか。なら、頑張ってくれよ」

その答えに満足したのかトーラーはそう告げると通信をプツンと切る。

「あめんぼ、青いな。あいうえお！　よし、通信がきれいるんだな」

ブレストは通信切れているをの確認する。

「ふん、トーラーめ！　いい気なれるのも今のうちなんだな！」
いつの日か、ぶっ潰して、僕がメネシスの中核になってやるんだな！
キコカ！
「じゃあ、お前達！　しゅーーーーっぱつなんだな！」
変形したブレストは量産機を引き連れて行動を開始する。
自らの野心を胸の内に秘め。
同時時刻――ミッドチルダ時空管理局・食堂
時空管理局執務官・ティアナ・ランスターは、目の前の少年に苛立っていた。
彼は、数日前に新しくきた補佐官で、コミュニケーションをとるために、連れ来たのはいいのだが、食堂につくなり、サンドイッチを片手にＩ　ｐａｄ的な端末で、作業を開始していた。
正直、あまりと言うか思いっきり行儀がよくない。
「ちょっと、デミル！」
「……」
注意しようと声をかけるが反応がない。

と言うか、完全に作業に集中しているようだ。

「デミル！　デミル・オズマ執務補佐官っ！！」

ティアナは先程よりも大きな声で声をかけた。

「はっ、はい！　なんでしょうか？　ランスター執務官！」

デミルは、目を丸くして端末を置きティアナの方へと向きかえる。

その要旨（ようし）は、首のあたりまで伸びた銀髪。

緑と淡いピンク色のオッドアイ。

比較的に整った中性的な顔立ちに、体つきをしていた。

そのため、ぱっと見に美少女に見間違えてします。

「あなたねぇ。食事中くらいは、仕事の手を止めなさいよ」

「はぁ、まぁ、僕もそうはしたいのですが、これ引き継ぎ作業なですが……」

ティアナの言葉に対して、デミルは目線をそらしながら、答える。

その瞬間両者の間に気まずい空気が流れた。

「前任者を、悪く言う気はありませんが、事件中に捕まったから、彼女の書類も僕に周ってきているんですよ」

デミルは肩を落としながら、告げてサンドイッチを口へと運ぶ。

ゴクリとサンドイッチを飲み込んでから「だから、昨日もあまり寝てないんですよね」と一言だけ、付け加える。

言うまでもないが、ティアナの前補佐官であるルネッサ・マグネスは、先のマリアージュ事件の主犯であり、事件中に確保されている。

そのため、事後処理の書類が公認である彼に周ってきている。

「だとしても、さすがねに食事中は行儀は悪いでしょ」

「ですね。今は作業は中断……あっ、エラー」

ティアナの言葉に同意してデミルは、中断しようしたが、端末の画面にエラーの文字が表示されいた。

その瞬間、二人とも苦笑い浮かべる。

「まぁ、バックアップは自室のあります。そこから、やりなおしますか」

デミルは天井を見上げならが乾いた笑顔を浮かべていた。

多分、本人がそう言っているのだから、恐らくそうなのだろう。

そうである事を願おう！

「なんか、ナレーションがネガティブなってるわよ！」

「失礼ですね。ちゃんとってありますよっ！！」

二人ともみごとにツッコンだ！

しかも、ナレーションに！！

まぁ、まわりに聞こえてませんが……

二人とも頭を抱えながら椅子に座った。

「ところで、貴方は私の所に来たの？」

ティアナは話題を変えるためにデミルが何故自分の下についたのかを尋ねた。

「さぁ、もともと、補佐官は僕の目的でしたが、ランスター執務官の下に配属されたのは上層部からの指示ですね」

デミルはあたりさわりもない答えで返した。

「まぁ、もっとも、有能で、とても魅力的な方の下に付けた分、僕は運が良かったのでしょう」

と、一言だけ付け加えるとサンドウィッチの最後の一個をたいらげる。

ティアナは彼の言葉に顔を赤くする。

「えっと、何か……僕、変な事言いましたか」

「いや、まぁ、何と言うか。ちょっと照れくさくって……」

まぁ、褒めた本人に自覚がなかろうとあろうと、面と向かって褒められるのは、褒められた側から見れば、照れくさいものである。

「はぁ、そうですか。とこで、執務官に後に立たれている女性はどちら様でしょうか？」

デミルはそう言って、ティアナの背後を指さす。

「えっ！　後！？……」

ティアナは後を振りむきそして固まった。

そこにはパスタが……では、なく大量のパスタ盛られてた皿を持った局員が立っていた。

しかも、パスタのが邪魔で顔が見えず、着ている制服と体格でなんとか女性だと判別できる。

ティアナは、それが誰なのかすぐに追い浮かんだ。

と言うより、単に彼女の知り合いで、女性でこれだけの量を数が限られる。

もとより、それが長年ともに行動した元相棒ならば、速攻でわかる。

「スバル、あんたなにしているの？」

ティアナは半ば呆れた口調で声をかける。

「いや、聞き覚えのあるから来て見たんだけど、何か話てる見たいだったから、終わるまで待った方いいかなって」

スバルはおそらくいつも通りの笑顔で答えているのだろうが、パスタによって見えない。

と言うより、むしろパスタと話てるようにしか見えない。

「取り敢えず、座ったら？」

「えっ、いいの？」

ティアナの言葉にスバルはデミルの方へ視線を向ける。

「あっ、僕はランスター執務官がよければ、構いませんよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

デミルの答えを聞いたスバルはパスタが盛られた皿をテーブルに置き椅子に座る。

「話を戻しますが、この方はどちら様でしょうか？」

デミルはパスタをおいしそうに食べているスバルを指しながら尋ねる。

「彼女はスバル・ナカジマ防災士長。六課時代の私の相棒よ」

「あぁ、噂に聞くシルバーのエースですか。お話はかねがねと聞いています」

ティアナの答えを聞いたデミルは軽くスバルに会釈する。

「私も聞きたかったんだけど、ティア、この娘(こ)は？」

スバルの言葉を聞いた瞬間、デミルは固まった。

「この子は、デミル・オズマ。ルネの後任の私の補佐官。あと、れっきとしおと……」

ビュン！

ティアナが訂正しようとした瞬間、スバルと彼女の間を斧らしきが飛んでいった。

次の瞬間、デミルが立ちあがり……

「僕は男だぁぁぁぁぁ！」

――――叫んだ。

その声色には完全に怒気に包まれていた。

「どうして、会う人、会う人、こう言う勘違いするんだ。あまつさへ、士官学校時代は、何か告白やら、ラブレターは送りつけて来る奴はいるし、男だと言って諦めてくれるなまだ良い！　中には「それでもいい付き合ってくれ」と言う奴はいるし、こっちはそんな気がないと言うのに、しかも、僕の着替えや訓練着がなくってるし時もあった。もう、ほんとあそこ、法的機関の訓練生を育てる所？」

人には触れて欲しくない禁句や、思い出しくないトラウマがある。

彼の場合は女性に勘違いされると言うものなのだろう。

ミッドチルダ時空管理局・地下駐車所

ドーン！

「なんだなぁ！」

床を撃ち破って、ブレストは駐車場へとはい上がる。

「ここが時空管理局か。ふむ、ここの技術を一通り吸収して、トーラーを蹴散らして僕が中核になって、有機生命体になるのも目じゃないんだなぁ！」

ブレストはあたりを見回しながら、わりと大きな声で自分の野望を口にする。

第七話　野心家・？（後書き）

今回登場したデミル・オズマがクロスリレー登場させる最後のキャラです。

第八話野心家・？（前書き）

新年初投稿です！！

第八話野心家・？

「さてと、意気込んだのいいんだが、なんか調べるのに適した端末か、接続できそうな場所は……」

ブレストは肩からケーブルの様なものを取り出しあたりを見回し始める。

意気込んで管理局の技術を吸収するためには、回線を繋げてハッキングをかけ、プロテクトを破壊いし、そこからデータを回線を吸収し長ければならない。

無線回線も積まれているがトーラーによって、通信でしか使う事が出来ない。

要するに、ブレスト単体では、データを手にする事は出来ない。

――――――

フェイト・T・ハロウオンは、地下駐車で茫然と立ち尽くしていた。

別に地下駐車で、変な某ロボット生命体や、某スペースオペラに出て来るロボットのできそこないが、徘徊さしているのが問題なのではない。

無論、それが大量に動き回っていることも問題ではない。

それらが出来た所に問題なのだ。

時間は分前に遡る。

書類整理が予定よりも早く終わり、次の仕事まで結構時間が空いたので、愛車の手入れをしようとし、駐車場来たところ、謎の爆発が起こり、彼女の愛車を粉々吹き飛ばし、現れたことが問題なのだ。

「バルディッシュ！！」

『イエッサー』

肩を震わせ怒りをあらわにして、バリアジャケットを展開させ、目の前のできそこないロボットに斬りかかる。

――――

《地下駐車にて、フェイト・T・ハロウオン執務官が所属不明の機械群と戦闘を開始！　武装局員は至急応援に向かってください！！
繰り返します。　武装局員は応援に向かってください》

フェイト・T・ハロウオン執務官ですか……
確か、ランスター執務官の詩にあたる方でしたね。
執務官としても、魔導師しても優秀な方かつ、かのエースオブエースの幼馴染にして、親友でしたね。
ランスター執務官もかなり有能なかたですが、師のとなれば、さらに有能な人物である可能性が濃厚！！
さすがにこれ以上はまずい！　まずすぎる！！
これ以上有能な人物と接点を持つのは、僕の……我らの一族の目的に支障がでる。

「行くわよ！　デミル！！」
「えっ、あっ、別に武装局員だけに呼び出しかっただけですし、僕達が行かなくても……」
「いいから、ぐずぐずしいない！　さっさと行くわよ！！」
「フェイトさんなら、負け事はないと思うけど全員で、向かった方が速く終わるし、被害も少なくすむだしょ」

まぁ、確かに正論と言えば、正論ですね。
ここは、変に拒むと逆に、怪しまれますね。
流れに身を任せて行った方が得策ですか……

はぁ、だから嫌だんですよ管理局への潜入調査なんて……

――――

『正体不明の機械だと……今度こそ奴かもしれん！！　行くぞ！
小僧』

さっき、ストームだっけ、何かバカっぽいロボットを撃退して帰って来たのに、アナウンスを着た途端これかよ……
つか、蠍のおっさんって飛べるのか？　あのなりで……
うん、まぁ、飛べたら、飛べたら、そうとうな愉快な形だな。

「イメージ的に誓ってのはわかるけど、必ずしもそうとは限らないだろ？」
『そうですよ。マスターをも少しいたわってくださいよ。すくなともパワーでガンガン押すレイジングハートのマスターと違って、そこまで体が丈夫じゃないのですから』

さらりと喧嘩を売る様な発言を言わないでくれよ！！
今は、本人いなけどさすが聞かれたら怒られるだろ！！

『ふん、しぶるか……ならば、リリスちょっと地下駐車場まで様子を見て来い！！』
えっ、ちょっ、まっ、なにってるの！？

「うん、わかった」

って、エェェェーーー！？　なに承諾してるの！！　危ないだろ！！

つーか、向かい始めるしぃ！！

『さて、どうする？　小僧』

「わーったよ！　行けばいいんだろ！　行けば！！」

こうなりゃやけだ！！　やけ！！

取り敢えず、騒ぎの原因になった機械は斬っちゃる！！

第9話　アンノウン（上）（前書き）

最初に言います私は車が嫌いです。

第9話　アンノウン（上）

地下駐車場にリリスを追って到着したのはいいんだけど……

「バルディッシュ！」

『イエ・サー』

これ、俺いらなくね？

既にフェイトさんによって結構な数、破壊されているし。

『ダナァ！』

あっ、隊長機っぽいの左腕落ちた。

「なぁ、ルシファー、帰っていいか？」

『なんでだ？』

「なんでって……どう考えてもフェイトさんの圧勝でしょ」

セロはルシファーの問いに対してセロは、あたりの状況を指さして答える。

ブレストはレーザーを撃ち、腕を振り下ろすが、それは全てフェイトに当たることはなく全てスピードが活かした戦いを得意とする彼女に全て避けられ回避されてしまう。

それでもブレストも、その部下にあたる機械たちもセンサーでサーチし、反撃と防御を行うが、追いつくことができない。

もともと、ブレストの構造として、外見通り防御力や火力に重点を置いた造りとなっている。

そのためにスピードは無く頑強な装甲で全身はおおわれている。だから、例え防御が置くたとしても、良くて小破、悪くても大破がいいところだ。

だが、それは相手が並みの魔導師の場合のみに該当する。

相手は執務官、しかもその中でも最高クラスの執務官、フェイト・T・ハロウオンなのだ誰が、誰がどう考えても負けはない。

『確かに、彼女は速いし強い。だが、それでけでは奴は倒せんぞ』

誰もが勝利が確信するよな状況の中、ルシファーは冷静な態度で口にする。

あまりにも圧勝ぶりに、することもなくほぼ観戦モードで流れ弾と、時たまに雑魚を相手にしているだけだのそれを聞いてあきれ顔で聞き流し、再度観戦を始める。

何と言う職務怠慢！！

それでも、ティアナやスバル、ヴァイスなり元六課の面々が、ちゃんと戦っているの救いだ。

そんな大半が観戦モードな武装局員達を見て誰かが、小声でポツリと「これが、民を守る人間のとる態度ですか」と呟く。

しかし、それも戦いに起きる騒音で聞き取れる事が出来ない。

「どう言う意味？　ルシファー」

『あぁ、リリスは忘れてるんだったな。あいつの能力を……」

リリスの言葉を見て、ルシファーは他の人間と接する時とは違う優しい声色になる。

彼にとっては現・マスターのセロよりも大事なのだろう。
『奴の長所は、防御や火力だけではなく、まだあるだよ。あいつだけの能力がな……ザラックにも他の馬鹿2人にはないやっかいな能力が』
ルシファーは忌々しそうに語る。
『有機生命体風情がなめるなぁ！！』
ブレストは怒鳴り声をあげ、破損個所から大量のケーブルを伸ばす。
それはブレストだけではなく配下の機体達もである。
そのケーブルはあちらこらに散らばる。
「なっ、なんだぁ！？」
セロは飛んでくるケーブルに唖然としていた。
ケーブルは駐車されている車や機能を停止した機体へと伸び、それらにはり付て行く。
そこから、パーツや装甲をどんどん引き剥がし。
パーツや装甲引き剥がしたケーブルは、もとの機体へと戻り、パーツや装甲をくみ上げ破損個所へと張り付けて行った。
『ダナァ』
ブレストは声をあげる。
ケーブルで回収したパーツや装甲によってダメージが回復していた。
とは言え、パーツや装甲もその辺集めたものため、色にまばらが出ている。

「なっ！？」
「あんなのありかよ」
セロやフェイト、ここにいる面々はあの光景を見て唖然とする。
たった一機ルシファーを除き……
「なら、もう一度壊せば」
『フォトンランサー』
ブレストにめがけてフォトンランサーを放つが……
『無断だな』
あたる寸前で、全段消滅した。
ブレストの体の周りには円形のフィールドが張られていた。
「バリア！？」
その公開を見てフェイトは、驚く。
この場に他の面々も同義だ。
先程まではそんな能力はんなかったのだから。
『やっぱり追加武装していたか』
その光景を見てルシファーのみは、冷静だった。
「知っているのか！？　ルシファー！！」
『まぁな。あいつの大砲も最初はレーザーではなく、ミサイル式のものだった。だが、戦えば、戦うほど、装備を変え自らを強化し続けてきた。幾度となくな」
ルシファー自体、ブレスト達と同じ時代に造られ、戦ってきたのだ。
だから、そのたびに見てきたのだろう

そう……何度も何度も。それこそ考えるのが、馬鹿らしくなる位に！！
それを聞いたセロは「マジかよ」と呟いた。
『どうすれば、いいのですか？』
『本来なら、リリスの強制停止コマンドが妥当なんだが……』
ブレイブハートの質問に対してルシファーは言い淀む。
セロは一瞬、リリスは状況を理解できていないのか首をかしげる。
今現在、記憶を失った彼女にそれを期待するのは無理だろう。
『しかも、ここには補給や補強なパーツも大量にあるしな』
ルシファーは忌々しそう告げる。
この地下駐車場と言うのは、まさに天地と言える場所だ。
ここにあるくまから、好きなだけパーツを取れるのだから。

――――――

「つまるところはここにある車を壊せばいい話ですけどねっ！！」
そんな声ともに1台の車が両断された。
それを見た局員の1人が人間の声にならない悲鳴を上げた。
今、破壊された車は彼のものなのだろう
「ちょっと、デミル！！　なにやってるの」
「なにって、敵の補強できそうなもの破壊しているんですよ」
ティアナに対してデミルはそう答えると、デバイスから魔力弾を出して車にぶつけ始める。
魔力弾をぶつけられた車は次々と爆散していく。
続けて近くにあった別の車を斬りつける。
その時の顔は薄く薄くだが笑顔を受けべていた。
それとは、対照的に車をここに止めている局員達はたまったもん

じゃない。

「何と言うか、楽しそうね？」

「まぁ、嫌いなものを壊しているのんですから、楽しいに決まっているんじゃないですか」

ティアナにそう告げるとデミルはまた一台車を破壊した。

――――

「おいおい、なんだよあの局員……車持っている局員がショックのあまり固まっちゃてるじゃん」

セロは敵ではなく車を破壊して行くデミルの行動を見て唖然としていた。

『そうか。手としては、間違っていまい』

確かにルシファーの言うとおり敵の補給や補強を絶ってしまうのは、一つである。

とは言え、車を持っている局員とにってはたまったもんじゃない。

自身の愛車が破壊されて行くのだから。

『強制停止以外に手はないのですか？　このまま車を持っている局員の精神が持ちません』

『ん、あるにはあるぞ』

ブレイブハートの質問に対してやにあっさりと答えた。

と言うか、あるなあるで早く言いなさい！！

既にデミルによって車が半数近く破壊されている。

しかも手として間違っていないため、上官であるティアナ止める事が出来ない。

『単純だ。パーツを取り込むにも一度、解体しなければならない。な

らば、粉々か、破損状態が少ない状態で機能停止にすればいい』
「可能なのか？」
ルシファーの言葉に対して、セロはブレスト達を見ながら尋ねる。
ブレスト達は全員頑丈そうで簡単に粉々にも、破損が少ない状態で機能停止にできる状態ではない。
しかも隊長格のブレストのに至ってはバリアを追加し防御をより強固なものにしている。

『可能だ。ブレスト達の中枢回路は全て背中にある。それは強化されても変わらん。だから、そこを破壊すれば一発で止まる』
ルシファーは簡単にブレスト達、タンクの弱点を告げる。
口で告げてしまえば、簡単だが実際の所そう簡単な訳ではない。
あの頑丈なから背中にある中枢回路だけを狙わなけらばないのだから。

『小僧、俺の指示に従え！　そうすれば、簡単に中枢回路を壊せるぞ！！』
ルシファーは現・マスターでもあるに関わらずセロに命令口調で語りかけてきた。
セロは、フェイトとブレストとの戦い、デミルによる車への被害に目を写す。
それから……
「はぁ、失敗するなよ」
一言だけ、そう告げると一気に走りだす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4760l/

リリカルなのは スクライア

2012年1月9日00時45分発行